

韓国におけるジュニア体操選手の育成システムに関する研究

著者	中村 剛, 田 光子, 韓 允洙
雑誌名	浅井学園大学短期大学部研究紀要
巻	44
ページ	75-87
発行年	2006-03-24
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000771/

韓国におけるジュニア体操選手の育成システムに関する研究

A Study of the South Korean Junior Gymnast Fostering System.

中	村	剛	田	光	子	韓	允	洙
Tsuyoshi	NAKAMURA	Kwang Ja	CHUN	Yoon Soo	HAN			

South Korea, unlike Japan, does not have privately managed gymnastic clubs. Instead, junior gymnasts are fostered in elementary school, junior high school and senior high school gymnastic clubs. However, as the number of such clubs is quite small, children generally are given few opportunities to experience participation in gymnastic events. This present situation within South Korea's gymnast fostering system is seen as one of the main causes of the country's chronic lack of gymnasts.

Nevertheless, despite their small numbers, Korean gymnasts have been able to successfully obtain consistently excellent results at recent international contests; a fact largely attributed to Korea's unique Junior Gymnast Fostering System.

In a recent study of ours, we were able to fully investigate and analyze the system employed by the South Korean Male Gymnast Enhancement Program. However, we were unable to ascertain the details of the country's Junior Gymnast Fostering System.

As such, it was decided to carry out this study to thoroughly investigate the fostering system employed for South Korean junior gymnasts.

As a part of this research, interviews were carried out with those involved in the training of junior gymnasts as well as others knowledgeable with the present training system. In addition, visits were made to training facilities, where observations of training exercises were carried out. As a result of the information we were able to collect from our on-site observations and interviews, we were able to gain an understanding of the special characteristics of the South Korean Junior Gymnast Fostering System, which plays an essential role in the support of South Korean male gymnastics.

Through our on-site investigations, we have been able to obtain fundamental data which can forthwith be applied to our own country's junior athlete fostering programs.

I. 研 究 目 的

韓国に日本のような民間経営の体操クラブは存在しない。ジュニア選手の育成は初等・中・高等学校の体操部で行われている。しかしその数は少なく、子どもたちが体操競技に触れる機会は限られている。このようなジュニア選手の育成現場、すなわち競技人口の底辺の狭さが韓

国における慢性的な選手不足の大きな原因の一つになっている。

体操選手の育成においてジュニア期から専門的トレーニングを開始することの重要性はもはや言うまでもない。ジュニア選手育成の成否がその国の国際的競技力を直接左右する。ジュニア選手育成の場が少ない韓国では、優秀な人材を早い段階で確保し、徹底したエリート教育を行うことによって国際的に活躍できる選手の育成に努めている。韓国男子選手が国際舞台において近年継続的によい成績を収めていることは周知のことであるが、そうした背景には、数少ないジュニア選手を世界に通用するまでに育てあげる韓国独自の育成システムの存在が大きいと考えられる。

我々は、先行研究において韓国男子体操選手の強化システムを明らかにしている⁽¹⁾。しかし、そこでは「クンナム」や「常備軍」といったジュニア選手の強化策の存在については把握できたものの、その具体的な中味やそこに携わっている監督・コーチの指導方針などについては明らかにすることができなかった。また、ジュニア選手の発掘および育成の場である学校体操部の現状についても明らかにすることはできなかった。

そこで本研究では、韓国におけるジュニア選手の育成に焦点を絞って調査することによって、その育成システムを明らかにすることが目指される。このように歴史的・文化的な環境、社会的・経済的な条件、学校制度に関しても共通点の多い韓国のジュニア選手の育成システムについて調査することによって⁽²⁾、我が国の今後におけるジュニア育成の在り方を考える上での基礎資料を得ることができると考えている。

Ⅱ. 研 究 方 法

韓国におけるジュニア選手の育成システムを明らかにするために、ジュニア選手の指導に携わっている人物やジュニア指導の現状に詳しい人物、現役の国家代表選手にインタビュー調査を行った。またジュニア指導の現場を訪問し、その訓練の様子を参与観察した。インタビューによって得た情報と訓練の観察結果に分析を加えることによって、韓国ジュニア育成システムの特徴を明らかにしたい。

現地調査は2004年9月14～18日と12月21～25日の2回に分けて行われた。この調査に協力いただいたインフォーマントは以下の通りである。

①イム・ジョミョン (임점용) 氏

現在のクンナム監督。チャンチョン (창천) 初等学校体操部の監督を務めている。韓国におけるジュニア選手強化の中心人物の一人である。

②チュウ・ヨンサム (주영삼) 氏

現在の常備軍監督。体操教室の経営者でもある。チュウ氏もまたジュニア選手強化の中心人物の一人である。

③イ・ジュヒョン (이주형) 氏

調査当時の国家代表監督。泰陵選手村で国家代表選手の予備軍としての高校生選手の強化にあたっている。韓国のジュニア育成の現状についても詳しい。

④カン・ビョンイ (강병의) 氏

ソウル市にある典農 (전농) 初等学校の体操部監督。韓国における体操人口の底辺を支える指導者の一人である。

⑤チョ・ソンドン (조성동) 氏

大韓体操協会男子強化委員長。ソウル体育中高等学校の教員であり、同校の男子体操部監督を務める人物である。韓国における男子体操競技の強化方針を決定する上で中心的な役割を果たしている。

⑥キム・ソンホ (김성호) 氏

ソウル体育中高等学校の教員であり、同校の女子体操部の監督を務める人物である。

⑦イ・ソッキ (이속희) 氏

韓国体育大学体操部コーチ。キム・デウン選手のコーチでもある。韓国におけるジュニア指導の現状に詳しい人物である。

⑧キム・デウン (김대운) 氏

現役の国家代表選手。釜山アジア大会、大邱ユニバーシアード大会、アナハイム世界選手権の代表メンバーである。アテネオリンピックの個人総合選手権において銀メダルを獲得したことは記憶に新しい。

また韓国におけるジュニア選手の訓練を参与観察する目的で以下の施設を訪問した。

①典農 (전농) 初等学校体操場

②ソウル体育中・高等学校体操場

③釜山体育高等学校体操場

なお、本文中に出典の断りがないものは、すべて筆者らが現地におけるインタビューや参与観察を通じて採録した情報にもとづいている。

Ⅲ. 調査結果と考察

1. クンナム (꿈나무) について

(1) クンナム制度

韓国では、体操競技、陸上競技、水泳競技の3種目を基本種目と定め、初等学校1年生から4年生までのジュニア選手を「クンナム」(夢の木)と称して国家が予算を立てて強化している。

クンナム選手は年に1度行われるクンナム選抜戦(꿈나무성발전)によって選出される。クンナム選抜戦は試合ではない。そこでは体育科学研究院(체육과학연구원)の研究員によって瞬発力や柔軟性といった基礎体力がチェックされ、審判員資格をもった大韓体操協会(대한체조협회)の強化委員によって基礎技能がテストされる。こうしたテストは、子どもたちを1時間くらい遊ばせながら行われる。子どもたちの基礎体力や基礎技能に関するチャートが出されたら、その数値を参考にしながら、体育科学研究院の研究員、文化観光省の担当者、大韓体操協会強化委員長、クンナム監督が会議をしてクンナム選手を決定する。

最初に開催されたクンナム選抜戦では、各市道から3名ずつの候補選手を募集し、そこで30名がクンナム選手として選抜された。その後は、4年生がクンナムを卒業し空いた分だけ選手を補充するため、各市道から2名ずつの候補選手を募集してクンナム選抜戦が行われている。このクンナム選抜戦は1泊2日で行われ、その際にかかる選手、コーチ、保護者の交通費や宿泊費は大韓体育会(대한체육회)から全額支給されている。

クンナムの候補選手は各市道の体操協会から推薦されて選抜戦に参加する。ただし、ソウル市に関しては地方に比べて選手の数が多いために独自に選抜戦を行って、選手を派遣することもあるという。

クンナム選手の訓練は夏休みと冬休みにそれぞれ9日間ずつ行われる合宿訓練だけであり、クンナム選手も普段は自分が所属している初等学校の体操部で訓練している。合宿訓練はその場所を様々な市道の体育館に移して行われている。この合宿訓練にはクンナム選手だけでなく、その選手が所属している初等学校体操部のコーチも一緒に参加する。合宿訓練にかかる選手・コーチの交通費や宿泊費、食費等は大韓体育会から支給される。またクンナムに選ばれた選手には、こうした合宿訓練に対する援助に加えて、年に数回の支援金(20~40万ウォン)が支払われている。

(2) クンナム合宿訓練の様相

筆者らは2004年の12月に釜山(부산)体育高等学校の体操場で行われたクンナム合宿訓練を観察する機会を得た(写真1)。クンナム監督はイム・ジョミョン(임점용)氏であった。イム氏はアテネオリンピック個人総合銅メダリストのヤン・テヨン(양태영)選手の初等学校時代の恩師であり、大韓体操協会の推薦を受けて、2001年の夏からクンナム選手の育成にあたっている。イム氏はチャンチョン(창천)初等学校体操部の監督でもあり、合宿訓練の時だけク

ンナムの監督として活動している。クンナム監督としての活動に対する報酬は大韓体育会から支給されている。

このときの合宿訓練に参加していたクンナム選手は12名で、指導者はイム氏を含めて7名であった。観察した訓練の内容は初等学校の低・中学年に対するものとしては少し厳しいという印象をもった。例えば、ウォーミングアップでは、手押し車、開脚浮腰支持

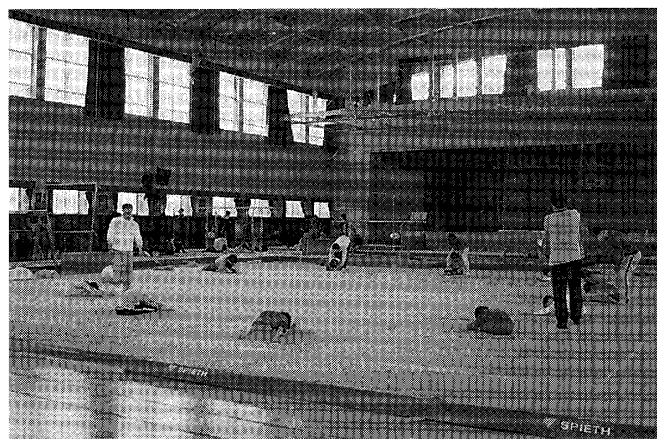


写真1：クンナム合宿訓練

からの伸腕屈身開脚力倒立、柔軟訓練（左右開脚座、前後開脚座、長座体前屈、肩関節の柔軟）、後方宙返りの連続などの基礎的なトレーニングが行われていたが、その反復回数がかなり多く、手押し車はゆか運動のフロア2周（約100メートル）、伸腕屈身開脚力倒立は30本近く、後方宙返りの連続は100回近く反復されていた。柔軟訓練は選手一人ひとりに大人のコーチがついて姿勢をこまめにチェックしながら行われており、その強度は高かった。

イム氏によれば、この合宿訓練は、子どもの体操に対する興味を誘発するのは当然のことながら、素質のある子どもを早い段階で、保護・管理することが最大の目的であり、自分はクンナム監督としてその責任を負っているということであった。一方、選手にとってクンナムに選ばれるということは、体操の訓練に対するモチベーションを高め、スポーツエリートとしてのプライドを植え付けることにつながっているということであった。

2. 常備軍（상비군）について

（1）常備軍制度について

韓国では初等学校の5年生から中学校3年生までの選手の中から特に優秀な選手を集めて、常備軍と称して特別に強化している。調査当時、泰陵選手村で訓練している韓国代表選手14人のうち13人が常備軍の出身者であり、この制度が韓国におけるジュニア選手強化にとって重要な役割を果たしていると言える。この常備軍には、全国少年体育大会（전국소년체전）で上位の成績をとった選手が選出される。なおこの大会はジュニア選手が出場する大会の中で最も規模の大きいもので、ジュニア選手を選抜するには最も適した大会である。初等学生は大韓体操協会の技術委員会が定める規定演技によって、中学生はつり輪のみ規定演技、他の5種目は自由演技で競技が行われる。

常備軍の訓練には、夏休みと冬休みに実施される合宿訓練（25日間）、ロシアや中国などの海外で行われる海外遠征訓練（15～20日間）、韓日交流訓練（約2週間）があるが、常備軍の選手も普段は自分が所属している初等・中学校の体操部で訓練している。合宿訓練に必要な経費は大韓体育会が支給している。また、常備軍の選手が所属する学校の体操部に対しては、大

韓体育会から選手一人につき250万ウォンの支援金が支払われるという。中学校体操部の1年間の学校予算が普通300万ウォン程度であることを考えると、この支援金は学校体操部にとってかなり大きなものである。さらに常備軍が所属する学校体操部のコーチには月に30～40万ウォンの報酬が支給され、選手自身にも支援金が支払われている。ちなみに、アテネオリンピック個人総合銀メダリストのキム・デウン選手も中学校の頃から月にいくらかの支援金を受けていたようである。

(2) 常備軍監督へのインタビュー

今回の調査では常備軍の訓練を観察することができなかった。しかし、常備軍監督のチュウ・ヨンサム(주영삼)氏にインタビューすることができた。チュウ氏は、1984年のロサンゼルスオリンピック、1988年のソウルオリンピックの韓国代表選手であり、大韓体育会の要請によって、10年以上、常備軍の選抜・指導にあたっている。普段は、自らが経営する松坡区梧琴洞(송파구오금동)体操教室で、子どもから大人までを対象に健康体操を教えており、合宿訓練などのときだけ常備軍選手の指導にあたっている。

常備軍は全部で27名であり、国内合宿訓練は、チュウ氏が訓練に適していると思う場所を選んで行われる。近年は、全羅南道(전라남도)体育高等学校で行われることが多いということであった。また、今回の調査が行われた2004年の韓日交流訓練は11月29日から12月4日の間が東京で、12月13日から18日の間がソウルで行われたという。

チュウ氏によると、常備軍監督の役目は、優秀なジュニア選手を選び出して大切に管理することであるという。アテネオリンピック個人総合銅メダリストのヤン・テヨン選手も常備軍の出身者であるし、さらに前述したとおり国家代表選手のほとんどが常備軍の出身者であることを考えると、チュウ氏によるジュニア選手の発掘および管理がうまく機能していると言えるであろう。

3. 国家代表選手Bパートについて

(1) 泰陵選手村における高校生選手の強化について

韓国では、特に優秀な高校生選手を選抜し、国家代表選手の予備軍(Bパート)として泰陵選手村(태릉선수촌)に集めて強化を行っている。1994年以前は高校生選手も常備軍の強化対象となっていたようであるが、当時、常備軍監督のチュウ氏の提案により高校生選手が常備軍の対象から外された経緯があり、現在、高校生選手の強化は泰陵選手村で行われることになっている。

選手村で訓練することを許される国家代表選手は、国家代表選抜戦(국가대표선발전)の成績によって選抜される場合と大韓体操協会の強化委員会の推薦によって選ばれる場合がある。主に高校生選手は後者の推薦制度によって選抜されることが多く、その場合、国内最大規模で開催される全国体育大会(전국체전)の成績や体力テストの結果、基本技、プロポーションな

どに関する客観的データに基づいて、強化委員会によって国家代表選手としての適正が判断される。当然のことながら、高校生選手は大学生選手や実業団選手に比べて競技成績が劣るため、その選抜にあたっては、即戦力という観点ではなく、将来の可能性を考慮するという。

この国家代表選手に選ばれた高校生選手は大韓体育会から生活費等の援助を受けながら訓練することができる。さらに器械体操代表選抜戦（기계체조대표선발전）において、オリンピックや世界選手権、アジア大会などの国際大会の代表選手（Aパート）に選出されれば、大韓体育会からさらに1日20000ウォンの手当を受けられるようになる。

（2）国家代表コーチのインタビュー

我々は、今回の調査において国家代表コーチをつとめるイ・ジュヒョン（이주형）氏にインタビューすることができた（写真2）。イ氏は1992年のバルセロナオリンピックと1996年のアトランタオリンピック、2000年のシドニーオリンピックの韓国代表選手である。バルセロナオリンピックでは個人総合8位入賞を果たし、アトランタオリ



写真2：イ・ジュヒョン氏へのインタビュー

ピックでは種目別平行棒で銀メダル、シドニーオリンピックでは種目別平行棒で銀メダルと種目別鉄棒で銅メダルを獲得している。イ氏は大韓体育会からの要請を受け、2001年の2月から韓国代表チームのコーチとして活動している。韓国代表コーチの任期は2年（再任可）であり、その報酬は大韓体育会から支給されている。

イ氏の話によれば、韓国代表選手の予備軍（Bパート）として泰陵選手村で訓練している高校生選手に関しては、数年後のアジア大会やオリンピック大会を見越して訓練をさせているということであった。しかし、選手村におけるBパートの強化システムに関しては少し改善の余地があるという。韓国ではオリンピックとアジア大会の間の2年間をワンサイクルとして国家代表選手を泰陵選手村に集めて強化を行っているのであるが、代表選考会が終わり、オリンピックやアジア大会に派遣する代表選手が決定してしまうと、Bパートの選手、すなわち代表選手に選ばれなかった選手たちは、各所属のクラブに帰らなければならないという。しかし次世代の代表選手を育てるという観点からすると、Bパートの選手もそのまま選手村に残して、大韓体育会の支援の下で継続的に訓練させた方がよいということであった。

4. 学校体操部における選手育成状況

（1）初等学校体操部

韓国には男子体操部のある初等学校が全部で38校ある^{（注1）}。ソウル市は韓国のなかでも体操

競技の盛んな地域の一つであり、初等学校男子体操部の数は6チームと各市道の中で最も多い。今回の調査において我々は、その6校のうちの一つである典農初等学校体操部の訓練を観察することができた。またその際、体操部の監督であるカン・ビョンイ氏（강병의）にインタビューすることができた。カン氏は、1990年の北京アジア大会の代表選手である。

典農初等学校体操部には男子4名、女子9名、合計13名の選手が在籍している。体操場はあまり広くはないが、ゆかのタンブリングマット、あん馬、ボックス、円馬、つり輪、低つり輪、跳馬、平行棒、棒間が狭くなる特殊な平行棒、鉄棒、段違い平行棒、平均台など、男女の体操器具が上手に配置されていた。

子どもたちはとても礼儀正しく、コーチのアドバイスを直立して真剣に聞いていた。練習は緊迫した雰囲気の中で行われていたが、子どもたちの表情に悲壮感はなく、むしろ明るかった。

カン氏によれば、4年生から6年生の選手は全国大会の規定種目（규정종목）の練習が中心で、1年生から3年生の選手は教保生命杯クンナム体育大会（교보생명컵대회）で使用する学年ごとの規定種目の練習が中心になるという。

規定種目に入っている技の練習以外には、基礎体力訓練、姿勢訓練が行われているという。体操部の練習は週に6日間（日曜日は休み）行われ、1日約3時間から4時間ということであった。

我々が訪問したときは、女子選手がゆか運動、男子選手が平行棒の練習を行っていた（写真3）。ゆかは「後転とびの連続」「前転とびの連続」「ロン

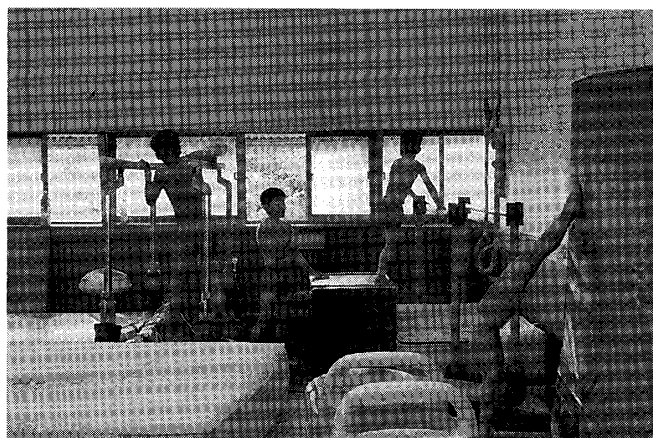


写真3：典農初等学校体操部の訓練

ダート～後転とび～後方宙返り」「前転とび～前方宙返り」といった規定種目をマスターする上で必要となる基本技やアクロバットシリーズの練習が中心であった。平行棒は、支持振動の連続、支持後振倒立の練習が何度も繰り返されていた。

この初等学校では選手発掘のために、初等学校の体育の時間を使って、1クラスごとに体操場で基本的なことをやらせてみて、才能のありそうな子どもを選手として勧誘するといったことを行っている。しかしながら、体操は怪我をするので、親があまりやらせたがらないということもあり、子どもの親を説得するのに苦労するという。

また初等学校では、市の教育庁が主催する体育大会、例えば東部教育庁杯（동부교육청배）大会などで運動能力の高そうな子どもを選び、そうした子どもの親を説得して体操部に勧誘することもあるという。このような場合、別の初等学校に通っている子どもを体操部に勧誘することもあるようである。

（２）中学校体操部

初等学校の男子体操部は全国に38チームあるのに対して、中学校男子体操部は21チームしかなく、その数はほぼ半減する。体操競技が盛んなソウル市でさえも中学校男子体操部は2チームしかない^(注2)。さらに、その2つの中学校チームのうちの1つ五輪中学校（오륜중학교）体操部は、学校内に体操場がないために、近くのソウル体育中高等学校で訓練を行っている。

今回の調査では、ソウル体育中高等学校において五輪中学校体操部の練習を観察することができた。また立ち話程度ではあるが、中学校体操部の指導者に話を聞くことができた。

先述の通り、全国少年体育大会において中学生はつり輪のみ規定種目、他の5種目は自由種目で競技を行うことになっているが、中学生選手が参加するその他の大会、例えばポスコ教育財団理事長杯（포스코교육재단이장배）などにおいても同様につり輪は規定種目、別の5種目は自由演技で競技を行うようである。

我々が観察した際、五輪中学校の選手は鉄棒の訓練をしていた。選手は3人であった。そこでは自由演技に取り入れる技の練習が行われていた。具体的な練習内容とおおよその時間は以下の通りである。

- ・前振りとびひねり倒立の連続（約40分）
- ・前振りとび1回半ひねり大逆手懸垂（Giant Swing bwd. with hop 3/2t. to double el-grip; Rybalko）（約30分）
- ・伸身トカチェフ（Swing fwd. and vault bwd. stretched; Tkatchev stretched）（40分）

これらの技の練習は、コーチによる補助を使って行われていた。鉄棒の練習が行われていた2時間近くの間、コーチは鉄棒の横に設置された補助台の上に立って選手の技を補助しながら、一人ひとりの選手に細かくアドバイスをしていた。筆者らは、ここでも一つの技にかかる時間の長さや反復回数の多さに驚かされた。

指導者の話によれば、練習は週に6日で、1日の練習時間は4～5時間ということであった。また選手の勧誘については、6年生の在籍している初等学校の体操部に直接で出向いて行っているということであった。

（３）高等学校体操部

韓国には外国語高校、科学高校、芸術高校など、特殊目的の高校があり、それぞれの分野に興味と才能を持った学生を別途に教育する学校制度が存在する。いわゆるエリート教育と言われるもので、スポーツエリートを育成するための体育高校もこの特殊目的の高校の一つである。このような体育高校は全国に12校存在している⁽³⁾。

また韓国には体操指定高校と呼ばれる高校がある。この体操指定高校とは古くから体操部をもっており、現在においてもなお高校生選手を育成する拠点となっている高校のことであり、

水原農生命科学高校(旧水原農林高校)が有名である。バルセロナオリンピック種目別跳馬の銅メダリストのユ・オンニョル(유옥렬)選手の出身校である。

このような体育高校や体操指定高校は学費が普通高校の約1/3であり、全寮制で食費、生活費の一切が支給されるという。前述の通り、クンナムや常備軍への支援は大韓体育会が中心と



写真4：チョ・ソンドン氏へのインタビュー

なっているが、こうした体育高校や体操指定高校への支援は教育庁が中心となって行っている。言うまでもないが、このような優遇の受けられる体育高校や体操指定高校に入学が許されるのは、ごくわずかのスポーツエリートだけであり、誰もが入学できるわけではない。

今回の調査では、ソウル体育高等学校体操部監督のチョ・ソンドン氏にインタビューすると同時に、同校体操部の練習を観察することができた(写真4)。

チョ先生の話によれば、練習は週6日であり、平日の午前中は座学の授業を受け、午後からは専門種目の訓練を行うという。しかし、全国体育大会の1ヶ月前からは、1日中訓練を行うため、その期間、午前中の授業は全く受けないという。我々が調査に伺った時は、10月に行われる全国体育大会の約1ヶ月前であり、1日9時間以上の練習を行うということであった。チョ先生によれば、ソウル体育高校はこの全国体育大会に照準を合わせているため、この時期の練習は特に長く厳しいということであった。

我々が訪れたときは、3～4人の選手があん馬の練習を行っていた。試合前ということで、演技の通し練習が中心であった。また、通し練習で失敗した場所については、チョ先生あるいはコーチから逐一アドバイスが与えられ、その失敗した箇所を繰り返し練習していた。通し練習の回数についてはチェックすることはできなかったが、あん馬の練習だけで2時間近くが費やされていた。

5. まとめ

韓国ではジュニア選手を、クンナム(初等学校1～4年生)、常備軍(初等学校5～6年生と中学生)、国家代表選手Bパート(高校生)と3つの年代に分けて、国家レベルで強化していた。

クンナムに関しては、本格的に開始されてまだ数年しか経っていないため、その効果については未知数の部分がある。けれどもクンナムの訓練を見る限り、才能ある子どもたちの保護と管理という目的は十分に達成されていると思われる。今後、韓国のジュニア育成にとって重要な役割を担うであろうことは想像に難くない。一方、常備軍と国家代表選手Bパートにおける

ジュニア強化が、才能ある子どもたちの訓練に対するモチベーションを高めることと、そうした選手の保護と管理に大きな成果を上げていることは、近年の韓国男子体操選手の活躍が証明しているところである。

このように韓国のジュニア強化にとって重要な役割を果たしている制度ではあるが、これらの間には直接的なつながりはない。しかし国家代表選手のほとんどが常備軍の出身者であることは先に述べたとおりであるし、クンナム監督によれば、近い将来クンナム出身の常備軍選手が多くなるだろうという話であった。こうしたことから、クンナム、常備軍、国家代表選手Bパートはそれぞれ独立した制度でありながら、才能ある子どもを早い段階で管理・保護し、一流の選手にまで育て上げるという目的に対して機能的に関連していると言えるであろう。

一方、こうした国家レベルでの強化策に対して選手を供給する役割を果たしているのは、各学校の体操部であった。トップレベルの選手の育成をその任とする高等学校体操部はもちろんのことであるが、練習内容や徹底した反復訓練、練習時間と頻度などから考えて、初等学校と中学校の体操部も、程度の差こそあれ（初等学校では興味づけという意味合いもあるので高等学校や中学校と同じようなスパルタ方式のエリート教育というわけにはいかないが）、スポーツエリート養成の色合いが濃いように見受けられる。

ちなみに韓国の学校におけるクラブ活動は、日本の学校における運動部活動とは少し趣を異にする。韓国は日本以上に学歴を重んじる社会であり、小さい頃からスポーツに打ち込ませようとする親は少ない。キム・サンク（김상국）氏によれば、韓国の学校は入試中心の教育制度であり、学校体育ですらなおざりにされているという⁽⁴⁾。こうした社会的風潮もあり、韓国ではスポーツ人口が少ないのが現状である。こうした中で学校のクラブに所属するということは、それ自体、すでにエリートスポーツへの参加を意味しているのである。したがって、日本のように中学校や高等学校で初心者が体操競技を始めるということはほとんど考えられない。韓国では初等学校体操部で基本的な訓練を積んだ者が中学校体操部に進み、同じく中学校体操部で訓練を積んだ者だけが様々な優遇措置の受けられる高等学校体操部の門をたたくことができるのである。

こうしたことから、韓国では、初等学校における選手勧誘が非常に重要な意味を持っていると言える。日本のような民間経営のジュニアクラブが存在せず、また中学校や高等学校から体操を始めることが現実的には難しい韓国では、初等学校体操部における選手勧誘や訓練への動機づけの成否が、将来の中学生選手、高校生選手、さらには国家代表選手の層の厚さに直接影響することになるからである。

しかし、上述した通り韓国は日本以上の学歴社会であり、小さい頃からスポーツに打ち込ませようとする親は多くない。また、野球やサッカーの人气が高く、それに比べると体操競技はまだまだだという。さらに、体操競技はケガが多い種目という認識もあり、敬遠する親も少なくない。韓国における初等学校体操部への選手勧誘はなかなか難しいようである。

初等学校の体操指導者は、学校体育の授業を借りた特別授業や教育庁が主催する体育大会に

において、才能ある子どもを発掘し、体操部に勧誘するという地道な努力をしているが、韓国における体操人口の底辺拡大というところにはほど遠い状況にある。

これまで見てきたように、韓国では少ないジュニア選手を世界に通用する選手に育て上げるシステムがほぼ確立しているのであり、今後、初等学校段階での選手勧誘が組織的・計画的に行われるようになれば、このシステムはさらに大きな力を発揮することになると考えられる。

IV. 結 語

今回の調査ではアテネオリンピックの銀メダリストであるキム・デウン（김대운）選手にインタビューすることができた。キム選手は、本研究で取り上げたジュニア育成システムによって育てられたスター選手の一人である。ここでは、このジュニア育成システムが韓国体操の世界的活躍の原動力となっていること、さらには、このシステムが初等学校体操部における地道な選手の発掘および勧誘によって支えられていることを示す証左として、キム選手の育ってきた過程を紹介することにしたい。

キム選手は初等学校4年生から体操競技を始めたという。通っていた全羅南道（전남）ヨンゴン中央（영공중앙）初等学校に体操部があり、そこの先生から勧められて始めたようである。始めた当時は、かっこよく、珍しく、おもしろく感じたそうである。その際、幼なじみで同じ韓国代表選手のキム・スンイル（김순일）選手と一緒に始めたという。このころの夢はオリンピックに出場することだった。

その後、キム選手はヨンゴン（영공）中学校に進学するが、そこには体操場がなかったため、初等学校の体育館で練習していた。さらにヨングァン（영광）高等学校へ進学するが、高校にも体操場がなく、初等学校の体育館で練習を続けていたという。

キム選手は中学校のときに常備軍に選抜され、高校2年生のときにアテネオリンピックに向けた若手選手の確保を目的として行われた国家代表選手選抜戦において、体力と姿勢が特に優れているという理由で、国家代表選手に選ばれている。

キム選手が初等学生の頃には、まだクンナム制度は本格的に始動していたなかった。しかし、キム選手は中学生で常備軍に、高校生で国家代表選手Bパートに選抜されており、これら国家レベルでのジュニア強化策が韓国初のオリンピック個人総合メダリストを生み出す上で重要な役割を果たしたことは明らかである。

しかしその一方で、キム選手は、自分が最も影響を受けた指導者は初等学校・中学校時代の恩師チョ・ジャンヒョン（조장현）先生だという。その理由は、チョ先生が「体操は基本（基礎体力・柔軟性・基本技・姿勢）が大切であり、基本ができていないと高難度の技もできない」ということを徹底して自分にたたき込んでくれた恩師であり、この先生のおかげで今の自分があると思うからだという。

確かに、常備軍や国家代表選手Bパートといった国家レベルの選手強化策がキム選手をメダリストに育てる上で大きな役割を果たしたことは紛れもない事実であるが、小学校時代に彼の

才能を見出し、体操部に勧誘し、基礎基本をたたき込み、体操への高いモチベーションを植えつけた、このチョ先生の功績は非常に大きい。初等学校体操部への選手の勧誘が難しいなかで才能ある子どもを見出し、そうした子どもたちを大切に育て上げる、チョ先生のような指導者の存在があって、はじめて国家レベルでのジュニア強化が可能になる。彼のような地道な体操指導者が、韓国におけるジュニア強化システムを支えている一番の功労者と言っても過言ではなかろう。

謝辞

現地調査にあたり、インタビューに協力してくださった指導者、選手の皆様に深く感謝申し上げます。なかでも、度重なる訪問にも快く応対してくださいましたソウル体育中高等学校のチョ・ソンドン先生には心からお礼申し上げます。

(平成16年度北海道浅井学園大学特別研究費による)

注記

(注1) 調査当時、大韓体操協会のホームページに記載されていた「2002年度チーム登録現状」の情報による (<http://www.gymnastics.or.kr./name/list08.htm>)。現在は2004年度チーム登録現状が載せられている。

(注2) 上述の「2002年度チーム登録現状」による。

(注3) ソウル体育中高等学校は、以前はソウル体育高等学校であった。今回の調査を実施した2004年度から中学校を併設している。

引用・参考文献

- (1) 中村剛・田光子・木内明・山田亮：韓国における体操選手の育成システムに関する研究，北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要第43号，53-67，2005
- (2) 木内明：韓国における教科カリキュラムの研究（1）－「教育課程」に見る韓国の体育科授業－，北海道浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要第3号，173-188，2003
- (3) 木内明：体育のカリキュラムの改善に関する研究－諸外国の動向－韓国，「教科等の構成と開発に関する調査研究」研究成果報告書（14），国立教育政策研究所，97-115，2003
- (4) 김상국：학교체육，무엇이 문제인가？，서울특별시체육회 잡지 시민체육，2003